



# しろね図書館だより

No. 84

発行 新潟市立白根図書館  
平成 19年5月1日

## 5月の展示架テーマ 「花物語 (花とみどりを楽しむ本)」

「ポケット詩集Ⅱ 童話屋」  
(ティーンズ 91-154)

自分はいまこそ言おう  
 なんてあんなにいきくのだろう  
 どこまでゆこうとするのだろう  
 どこで此の道がつかまるのだろう  
 この生の本一本みちがどこかでつきたら  
 人間はそこでどうなるだろう  
 おお此の道はどこまでも人間とともに  
 つきないのではないか  
 谷間をながれる泉のように  
 自分はいまこそ言おう  
 人生はのろさにあれ  
 のろのろと蝸牛のようであれ  
 そしてやまず  
 一生にニどと通らぬみちなのだから  
 つつしんで  
 自分はいまこそ言おう

自分はいまこそ言おう

山村喜鳥

## 第79回読書会 「ブエノスアイレス午前零時」 藤沢周著 (河出書房新社)

日時・場所 5月20日(日) 午後2:00～ 白根学習館ルーム2

くしろね図書館友の会・しろね図書館 共催

著者は新潟市出身。第119回芥川賞受賞作。

舞台は新潟。場末の温泉旅館、温泉卵、ダンスホール、タンゴ……雪、雪、雪。旅館の従業員カザマと痴呆気味の老婆との心の交流を描いた作品。

### 4月の

来館者 ----- 15,064人  
 貸出冊数 ----- 14,744冊  
 予約件数 ----- 215件

ブックバス利用者 ----- 397人  
 ブックバス貸出冊数 ----- 930冊

### リクエスト情報 (しばらくお待ち下さい)

- 1位 陰日向に咲く (5名)
- 2位 鈍感力 (4名)
- 3位 回転木馬 (2名)

風が強く吹いている

ハリポッターと不死鳥の騎士団 上下

他 夜は短し歩けよ乙女

## 子どもたちといっしょに

## 「おかあさんがおかあさんになった日」

長野ヒデ子 さく (童心社)

5月13日(日)は母の日です。おかあさんの愛情に感謝する日。

母の日(※)の起源は、20世紀初めアメリカのジャービスという女性が七き母のために教会で白いカーネーションを配ったことに由来し、1914年にウィルソン大統領が公式に祝日に制定してから世界に広まったとされています。母親が健在の人は赤いカーネーションを、亡くなった人は白いカーネーションを捧げるそうです。日本では第二次大戦後にアメリカにならい5月の第2日曜日を母の日と定められました。

親にとって子どもはかけがえのないもので、子どもにとってもそれは同じです。普段、どうしておかあさんはおかあさんなのかと考えることなんかありませんが、この絵本にはその答えがちゃんと見つかります。

「あかちゃん こんにちは、おかあさんよ。よろしくね。あなたのおかげで、わたしはおかあさんになれたのよ。わたしのあかちゃん、ありがとう。あなたのうまれた日、おかあさんが おかあさんになった日。」  
 どうです? 久しぶりにおかあさんの声が聴きたくありませんか?

(※)『記念日・祝日の事典』 加藤迪男編 (東京堂出版) 2006年

『日本大百科全書 19』 相賀徹夫編著 (小学館) 1988年

『世界大百科事典 5』 下中直人編 (平凡社) 1988年, 2004年版



## 5月の行事 ブックバス

2 (水)	絵本のじかん 3:00～		18 (金)		白根小 白井中	10:10～10:40 12:55～13:35
5 (土)	おはなし会 3:00～		19 (土)	おはなし会 3:00～		
8 (火)		月湯中 13:00～13:50	20 (日)	第79回読書会 2:00～		
9 (水)	第79回おはなし会 絵本のじかん 3:00～	味方小 13:10～13:50 大鷲小 14:30～15:45	22 (火)		月湯中	13:00～13:50
10 (木)		新飯田小 12:35～13:20 茨曾根小 13:35～14:35	23 (水)	絵本のじかん 3:00～	味方小 大鷲小	13:10～13:50 14:30～15:45
11 (金)		小林小 10:10～10:40 白井小 12:55～13:35	24 (木)		新飯田小 茨曾根小	12:35～13:20 13:35～14:35
12 (土)	おはなし会 おはなし会 3:00～		25 (金)	雑誌リサイクル	小林小 白井小	10:10～10:40 12:55～13:35
15 (火)		根岸小 13:10～13:50	26 (土)	おはなし会 3:00～		
16 (水)	絵本のじかん 3:00～	白根北中 13:10～14:00 大通小 14:15～15:35	29 (火)		根岸小	13:10～13:50
17 (木)		白根中 12:55～13:35 庄根地C 14:00～14:40 庄根小 15:00～15:45	30 (水)	絵本のじかん 3:00～	白根北中 大通小	13:10～14:00 14:15～15:35

\*ブックバスの停車日時・場所が変更になっています。ご注意ください。

「和のしきたり 日本の暦と年中行事」 新谷尚紀監修 (日本文芸社)

(一般 382頁)

わたしたちの生まれたこの日本。まだまだすばらしいところがたくさん残されています。季節に則した農業、気候にあった家屋、土地によって異なった習慣。言葉もそうです。その土地によって変化し、かつこれほど狭小の中に多種多様の言葉(方言)が存在するのは世界でも珍しいことです。

私たちの祖先はこの日本で四季を感じてそれを愛でてきました。八百万の神とって、虫や道具、目にするものすべてに神が宿っていると信じて大切に扱ってきましたし、お祭りはその神様に祈願と感謝をこめるもので、大切な習わしのひとつです。現在、人々は都市に集中し、その反対に農村部では過疎化が進み、集落が消えその土地のしきたりや習わしもだんだんと消えていっています。しかし、このしきたりや習わしには先人の知恵がたくさんつまっています。

みなさんは毎日すこしずつ形をかえている月もそれぞれに名前があることを知っていますか。旧暦を使っていた昔の人は新(朔)月から三日月、満月(十五夜)へと変わっていき、それからまた新月に戻るとき、毎日違った呼び名を付けていました。上弦の月、下弦の月、十六夜月(いぎよい)という言葉を知っている人も多いと思いますが、十六夜の次の日は立待月(たてまちづき)でその次の日は居待月(いまちづき)、臥待月(ふしまちづき)、更待月(ふけまちづき)と変わっていくことを知っている人はそうはいないでしょう。昔の人たちはこの月の満ち欠けが身の回りに大きな影響を与えていることをちゃんと知っていて、名前をそれぞれ付けて暮らしの道しるべとしていたらしいのです。

旧暦ということばが出てきましたが、明治6年(1873)に日本ではそれまで使っていた太陰太陽暦(旧暦)から太陽暦(グレゴリオ暦)に変わりました。太陽暦とは太陽の運行を基につくられた世界でもっとも広く使われている暦で、太陰暦とは月の満ち欠けを基につくられています。

暦が出てきたのもう少しその話を。1月、2月、3月・・・1年12ヶ月それぞれ月に異名があることはみなさん知っていると思います。1月は睦月、2月は如月、3月は弥生・・・という風に。そして10月は「神無月」ですね。しかし、出雲だけは「神有月(神在月)」となるそうです。それは日本中の神々が1年に1度、出雲大社に集まってくるということでこの地方だけは「神(が)有(る)月」となるそうです。確かに神様がいらっしゃるのに神無月ではおかしいですからね。また、この異名についても睦月、如月、弥生・・・の他にいろいろな呼び名があります。梅見月(2月)、花見月(3月)、月見月(8月)春待月(12月)・・・日本的で素敵なことばばかりです。

他にも遠足は昔の行事の名残で、神様を迎えるために旧暦の3月と4月はごちそうを作り、農事の前に山へでかけ、神々と共に食事をする行為が今日の遠足へと変化していったものと考えられていたり、出産の無事を祈るのに多産安産な犬にあやかることをしていたりや神様を敬い自然と同化した日本のしきたり、習わしは日本にこそ合った先人の知恵なのです。それを消してはいけません。

パソコンが一般家庭に普及している今、文字を書くという行為がなくなってきましたが、このしろね図書館館だよりの半分は手書きで書かれています。これもしろね図書館のしきたりとでも言いましょうか・・・。

(司書 小林友治)

第七十八回読書会

平成十九年四月十五日

参加者四名

『となり町戦争』



三崎亜記者 (集英社)

【となり町との戦争のお知らせ】

それは、広報紙の片隅に小さく載っているだけだった。突然の戦争。開戦の日を迎えても、主人公はわけもわからぬまま、通常と変わらぬ生活を送っていた。戦闘の音もなく、戦争の気配も感じない。ところが広報の町勢概況では、戦死者が増え続け、ある日、主人公に役場から一通の郵便が届いた。それは・・・。

第十七回小説すばる新人賞受賞作。三崎亜記さんは本作がデビュー作。映画にもなっている。

☆ 参加者の感想 ☆

わけもわからず戦争に巻き込まれ、しかしなかなか自分自身で「戦争」というものが

実感できない、という主人公の状況・心情と一緒に体験し、感じているような不思議な感覚を始終覚えた。最後まで物語の展開が読めず、今までにない斬新な小説だと思った。

一体何のための戦争で、どのような利益があるのか、またどのように戦争を行っていいのかなど全く実体が分からない状況が、感情をあまり見せない主人公、香西さんの二人が中心となって描かれているので、より一層実体が分からず、無機質な感じのする話だった。

自治体間の戦争で、条例に基づき行政が行っているという変わった設定。この町以外にも戦争をしている市町村もあるのだ。職場でも話題にならないし、ラジオやニュースでも取り上げない。そんな静かな戦争は不思議な感じだった。

この小説では色彩を感じなかったが、主人公がとなり町から自分の町へと戻る場面では、どうなるのかとすごくハラハラし、こわくてすごく鮮やかな場面だった。

文庫もあったので、ハードカバーと比べてみたら、文庫版には特別書き下ろしの別章があった。みなさんも読んでみてください。内容は話さないでおきます。

この戦争の一番の被害者は香西さんだと思

った。身も心も人生までも戦争に捧げている、殺し合うこともそうだが、こんな理不尽さが戦争なんだと感じさせられた。すごく謎だったのが、鉢植えが戻って来た事。どこへ行ったのでしょうか？

行政の事が細かく書かれていて、いろんな書式も載っていたので面白かった。あまり詳しいのでどうやって取材をしたのかと思ったら、著者の職業は公務員だった！

となり町との行政サービスの違いを題材としたぐらいの物語だろうと思いつながら読んでいったが、役所の組織や機構など仔細に描写されていた。また、組織の一員として忠実に働いているヒロインが、主人公との付き合いや会話を通して次第に人間味を帯びていく様子など、安心感を覚えた。

次回の読書会は、

『ブエノスアイレス午前零時』

新潟出身の藤沢周さんの作品です。参加希望の方は、図書館カウンターで本を貸し出しておりますのでお声がけください。読書会とは、参加者が同じ本を読んで来て、印象に残った場面や特におもしろかった箇所を話し合う会です。本を読んでくれば、どなたでも参加できます。気軽にご参加ください。

(中川沙穂里)